

ハイマート Heimat

ぐんま日独協会 会報

2014年7月5日

44号

発行者 鈴木 克彬

発行所 ぐんま日独協会

〒371-0105

群馬県前橋市富士見町石井 2445-219

電話 : 027-288-4297

E-mail : info@jdg-gunma.jp

ホームページ : <http://www.jdg-gunma.jp/>

ホームページ右下『ハイマート』から本誌をカラーでご覧いただけます。



Louis Kniffler 初代在日プロイセン領事 (1827-1888) の
記念碑除幕式 (2014年5月30日ドイツ・デュッセルドルフにて)

1. ハイマート 44号に寄せて (会長のことば)	2
2. 日独連合会「若手の集い」に参加して	3~4
3. ドイツひとり旅	5~7
4. チェコ・オストラヴァ市滞在記	8~11
5. ドイツ旅行の豆知識 (ドイツからの寄稿)	12~14
6. デザイナー修行奮闘記 (連載-4)	15~16

1. ハイマート 44 号に寄せて — 会長 鈴木克彬

『教わる』と『学ぶ』の違いを学習

・ ・ 全国独日協会連合会総会（デュッセルドルフ）に参加して ・ ・

平成 26（2014）年 5 月 28 日（水）・29 日（木）・30 日（金）の 3 日間ドイツ・デュッセルドルフで行われた全国独日協会連合会総会及び分科会に参加して来ましたので、その概要を報告します。ぐんま日独協会田部井事務局員も参加しました。

日 程 5 月 28 日夜、各地区協会のプライベートな集まり

5 月 29 日昼間、地元協会主催の歓迎行事『ライン河観光船貸切り川下り』

〃 夜、全国独日協会連合会主催の『前夜祭』

5 月 30 日昼間、全国独日協会連合会総会とテーマ別 3 分科会

〃 夜、駐独日本大使主催の晩餐会

5 月 31 日 午前、取り纏め報告会

・ ・ ・鈴木夫妻と田部井さんは、29 日 30 日の行事に参加出席 ・ ・ ・

内 容 A 総会行事等の内容は省略

B 分科会テーマ

1. 日独の政治的課題と今後の方向性
2. 日独の文化交流と今後のテーマ
3. 日独交流、次世代若者グループの育成

C 分科会の内容 ・ ・ ・鈴木は第 2 分科会（日独文化交流）に出席 ・ ・ ・

1. 政治的課題は、現在成長中の中国、インド、ブラジル等についての話題が多かったようです。
- 2-1. 文化交流では、日本のアニメ、マンガ、コスプレ等がドイツでは相変わらず人気で、日本語講座を開くと、“一刻も早く日本語版のマンガを読みたいため、その講座に若者達が多く参加する”との話題まで提供された。
- 2-2. 鈴木は「マンガ・コスプレ等を好むのは、日本人の一部であり、これを日本文化と解釈して良いか少々疑問」と発言した。
- 2-3. それに対し、ドイツに住む日本人の女性（ドイツ人と結婚）から、「日本に関心を持ってもらう入口として、アニメ・マンガは大切」との発言があり、鈴木も納得せざるを得なかった。
3. ドイツの若者グループは、アニメ・マンガを中心テーマとして一つの団体が成立しており、その団体が全国独日協会連合会に参加登録している、とのこと。

D 講義（教わる）中心から、全員参加のクウェッションタイム重点に ・ ・

ドイツの分科会に参加し特に感じたことは、ドイツ人は“参加者が意見を出し合い、学びながら方向性、結論を出していく”と言うことを改めて学びました。今後の集まり等で活かしたいと思います。

2. 全国日独協会連合会 第8回「若手会員の集い」報告書 (瓜生 郷子 記)

2014年3月21日(金・祝)日独協会事務所にて全7協会～男性12名(内ドイツ人1名)、女性8名(内ドイツ人2名)が参加して「若手会員の集い」を行いました。

第一部 各協会の紹介と参加者の紹介

参加者の中で各協会の代表から活動や現在の問題点などが説明された。東京日独協会は100年前から設立されており当時は敷居の高い会であったが、今はフレンドリーな団体になっている。しかし現在イベントは若い会員中心と年長の会員に別れている事が問題点である。イベントの一つにタンデム・パートナー(二人で言語を勉強する)がある。日独協会でのパートナー探しは日本人は会員であることが基本になっている。(タンデム®とは2人で力を合わせて前進することです。ネイティブスピーカー同士がお互いの言語を学ぶのを助け合います。長く続けられる、相性の良いタンデムパートナーを探すために、日独協会はタンデム®財団によって開発されたメソッドを使います。日独協会会員のための無料サービスです。)他の協会では高齢化の進行、高齢者と若手の目的の違い・興味対象の格差などから、若手が集まらなかったり、青年部を独立させたりと、苦勞・試行錯誤をしている姿が印象的であった。また、大阪日独協会の日独交流を支援する会社の元での活動報告も興味深かった。

第二部「日独青少年協会を日独協会のもとに作ってはどうか」

*高橋さんより第8回日独ユースサミットの説明があった。

*今日の議題をタベアさんが下記のように説明した。

ドイツで開催されるユースサミットはDJJG 日独青少年協会が主催しており日本でもユースサミット開催に合わせ JDJG 日独青少年協会を日独協会のもとに作ってはどうか?なぜならそれにより、より多くの若者が日独協会の会員となれば協会の活性化につながると思われるからである。本日は JDJG の創設を仮定、参加年齢の制限、日独協会との協力関係、運営費、この3点についてグループディスカッションをしたい。

*タベアさんから届いたグループディスカッション後のアンケート報告は次のような内容であった。

- ・意見の方向が少し偏ってしまっている感じがしました。一つの方向だけでなく、賛成・反対の両意見を取り上げた上で、より良い方向に行けたら良いと思います。
- ・ネットワークを全国に広げていく大切さ・必要性をととても感じました。
- ・横のつながりの可能性が見えてきたと思います。何かの形でネットワークが出来たらいいのではないのでしょうか。西日本日独協会としては、DJJG&Hallo Japan等を青年部活動の一つとする予定です。
- ・JDJGについては初めて今日のお聞きしましたが、とても良いアイデアと思います。各地にメンバーが散らばっている事の強みを生かした連携の在り方を深めていくと良いのではないのでしょうか。
- ・他県の日独協会ではこんなにも若手の方々が活発に活動している事に驚かされました。

た。地方にいと入って来ない情報や出来ない活動も、他協会と協力する事によって、何かの繋がりを作る事が出来るのでは・・・と少し期待を持つ事が出来ました。

- ・中高年の、ドイツ人と日本人（日本在中の）交流会を企画してほしい。
- ・全国の日独協会の若手会員とオンラインなどで、つながりを持てればと思うのでその方法について考えたい。
- ・タベアさんの話にもあったが、ネットワークづくりは非常に重要だと思う。各地で独特の活動をしている部分もあるのでそれを活用して全国レベルでの活動に広げられたら良いと感じる。
- ・45才以降60才前ぐらいの集まり出来ればまた別な Back up 体制がとれる様な気がしました。

今回「若手会員の集い」に参加した感想

前半の各協会からの活動の説明は、ぐんま日独協会での活動が短い私にはとても興味深く同じ日独協会でも色々と異なった活動があり皆さん創意工夫されている事を知りました。西日本日独協会での青年部の設立、大阪日独協会の日独交流を支援する会社の元での活動、東京日独協会のタンDEM・パートナーを探す活動など特に興味深く聞きました。そして各日独協会ともに年齢の高い会員が多く若い会員が増えないという問題が大きい事を理解しました。その背景には、日独協会は当初医師、研究者、などが中心となり発足し、その方々によりここまで発展、しかし現在ドイツに興味のある方が参加する様に目的が変化してきており、その新しいターゲットへの認知、特に若者への周知が今後の日独協会発展のポイントとなるようです。

私はぐんま日独協会のサロンなどでの活動を通じて年齢層での偏りによる問題は感じたことはなく、年齢の幅を超えた素敵な交流が出来ていると感じていました。ただし私は全体を把握しているのでもなく活動経験も短いのであまり様々な問題点を理解してないのかもしれないです。

今回の課題「日独青少年協会を日独協会のもとに作ってはどうか」に関しましてはドイツでの DJJG の活動を参考に日本版で JDJG を発足するのではなく、西日本の様に青年部という活動部を協会下に作った方が今の体制には合っているような感じがしました。そして重要なポイントとして壮年部も同時に起こし三世代が上手く交流出来るシステムを考えるのが上策と思いました。なぜならば話し合いの中で若い会員は若者だけの交流空間を強く希望しており、その理由として興味の対象の違いを指摘されたからであります。ならば今後想像される問題点は世代間交流であり、その橋渡しが出来るのは35歳から60歳までの社会でネットワークを持ち社会貢献度の充実しているこの世代が重要な役割を果たすと思うからです。この世代の活動や交流も次世代のために重要なポイントとなるのではないのでしょうか。また地方での交流の活発化としてドイツから訪れる方々にタンDEM・パートナーのシステムを変化させて、地方の会員の方がホームステイや案内を提供できるような登録制のシステムを作るのも一策かと思いました。

3. ドイツひとり旅 –ひとり旅 予行演習– (田部井 欣司 記)

ドイツ訪問も今度で五度目であるが、今まではほとんど団体での行動であった。今回は意を決して、出来るだけ自分で計画から手続き、そして行動までする事にした。とはいえ、多くの方々にアドバイスを頂いたからこそ実行できたことである。

5月28日:午前4時55分のアザレアで成田へ向かう。11時35分のフライトだが、早めの行動だ。これからの行程も早め早めの行動を心がけての第一歩である。

フランクフルトの到着は16時35分だ。そこからはデュッセルドルフの日航ホテル行きの無料バスを利用することにした。空港では、バス停へ行く道順が現地のJALの職員の説明がそっけなくあせってしまった。出発まで一時間あると聞いていたが乗るとすぐ出発したので、なれない旅の最初の不安材料だった。そこでは大和田ご夫妻が待っていてくれ、宿泊先のホテル ビスマルクへ同行してくれた。フロントでは、「さあ！ドイツ語でチェックインして！」と最初のドイツ語会話の洗礼である。ここでは三泊である。明日は、第一の目的であるライン川のクルージングである。船内ではメンヒさんや大坂さん、ハレでガイドをして頂いた Chiyo Stang さんにお逢いできた。メンヒさんには對馬さん、樋口さんからの伝言をつたえた。Xanten の見学をした。外は寒くて辛かったが、紀元2世紀ごろのローマの遺跡を見学し貴重な体験をした。



【LVR RÖMER MUSEUM】

5月31日(土) : 午後、大和田ご夫妻とマンハイムへ向かう。

6月1日(日) : 大和田ご夫妻と Ladenburg へハイキング。Marktplatz で11時半の待ち合わせで Ladenburg へ向かう。いつも大和田夫妻が食事している Benz 直営のレストランで昼食をとる。Benz の写真などが飾られていた。Dr. Carl Benz が最初に建てた工場を見学。クラシックカーのオンパレードだ。生家にも色々な自動車関係の部品や初期の車が展示されていた。外には当時の車庫が残されていた。かえりは



【Dr. Carl Benz の生家】

Straßenbahn で帰る。

6月2日(月) : 7時31分ミュンヘンへ ICE で向かう。片道3時間の旅である。私の家の前の娘さんに頼まれ物をとどける。その後、ノイエピナコテークへ向かう。19世紀から20世紀の比較的新しい作品が展示されている。ゴッホの「ひまわり」、ゴーギャンの「テ・タマリ・ノ・アトゥア(神の子)」を見る。絵画にうとい自分としては、本物を見た、という感覚だけである。

6月3日(火) : 午前中マンハイム城を見学。午後は大和田さんと日本へのおみやげさがしである。16時30分にゲルノートさんがマンハイム駅に迎えに来て Schwetzingen へ向かう。楽しみのヘンデルのオペラ鑑賞だ。Schloss Schwetzingen にある Rokokotheater に向かう。Carl Theodor が建てた城である。午後7時半の開演である。入場券のタイトルは La Cetra Barockorchester und Vokalensemble/Carlos Federico Sepulveda(Gastdirigent ゲスト指揮者)である。二人のカウンターテナーが歌い、ソプラノとコーラスの厳粛な響きに感動した。



【Schloss Schwetzingen にある Rokokotheater】

6月5日(木) : 7時31分マンハイム発の ICE で Ulm へ向かう。1時間半の旅である。目的であるドームへ向かう。とにかく大きい。高さ161.53メートルのドームに圧倒される。一大決心して登ることにする。螺旋階段を登ること30分、大人がすれちがうのがやっとなのである。すべて石作りである。崩れないのが不思議だ。地震がないからか。人がだんだん小さくなっていく。比較的広い場所にたどり着く。真ん中に更に階段があるが怖くて断念する。女の子が降りてきたのにはびっくり。降りるときは嘘のように楽だ。階段を数える



【Ulm のドーム】

ことにした。530 段だ。

6月6日(金) : 7時31分マンハイム発のICEでKölnへ向かう。1時間半の旅である。Hbfを出て、びっくり、目の前に巨大なドームそびえ立っている。中へ入ってみる。入場無料だ。Ulmでは4ユーロだった。とにかく大きい。ステンドグラスがきれいだ。ガイド付きの団体もいてものすごい人出だ。古い絵画や彫刻がいっぱいだ。外へ出て、隣のRömisch-Germanisches Museumに入ってみる。7ユーロだ。文字が刻まれた巨大な石がところ狭しと並んでいる。小物の青銅製の槍の先や金の首飾りなども多く見られた。今日は早めの13時55分のICEでマンハイムへ戻る。



【Kölnのドーム】

6月8日(日) : 11時にHotel Krupfzstubeをチェックアウト。大和田さんご夫妻が迎えに来てくれた。今年最高の暑さの32度でご夫妻は根を上げていた。大和田さん宅を午後3時ごろおいとまし、ゲルノートさんの車でFrankfurtへ向かう。19時20分のフライトだ。



【Frankfurt 空港】

6月9日(月) : 13時40分に成田に到着。アザレアにて前橋へ向かう。途中道がすいていたため18時前に到着。我が家へと向かう。13日ぶりの我が家である。

4. チェコ・オストラヴァ市滞在記 (松原 千津子 記)

チェコへは、今回が3回目の滞在でした。

初めての訪問は5年前のプラハでしたが、今回はチェコ的最東部にある第3の都市・オストラヴァ市でした。今年4月1日より5月いっぱいまでの2ヶ月間、その都市にあるオストラヴァ工科大学での「日本語」の非常勤講師を任されました。私は、チェコ語はあいさつくらいしか話せませんから、使っていた言語はほとんどが英語で、英語よりドイツ語の方が分かりやすい学生には、ドイツ語でコミュニケーションを図っていました。



オストラヴァ市は、人口約30万人の工業都市で、そのオストラヴァ工科大学の学生数だけでも、2万5千人、職員は2千人程と聞きました。それ程の大学でも、日本語を話せる者は皆無で、英語ですら話せる学生が多かった訳ではありませんでした。その中でも、ドイツ語とロシア語を話せる学生は比較的多かったです。その理由としては、昔それらの国の占領下にあったという重い歴史の背景があると思いました。

大学のキャンパスは、本当に巨大でアメリカの大学と同じようです。その中を、先生方は講義の度に車で移動していましたが、私みたいな外国人非常勤講師は車を持っていませんので、どこへ行くにも旅行用のキャリーバッグをガラガラと引きずって移動していました。他の先生に「そんな風に講義に向かう先生は見たことないから、きっとチヅコはこの大学で有名になるね！」なんて、冷やかされたくらいです。日本の全ての大学がどうなっているかは、把握しているわけではありませんが、明らかにこの大学特有だなと思ったのが幾つかあ

りました。私がちょうど5月の卒業の時期に滞在していたので、貴重な体験をしました。それは、卒業の2、3週間前になると、大学全体がお祭りモードに入っていきます。その一つとして、構内でしかも夜に学生による野外のロックコンサートが行われました。次の週には、スポーツフェスティバルと称して、大学内外で各々のスポーツイベントが開催されました。そして最終日には、街の中心から学生達がパレードを行い、その夜には大規模なダンスパーティーが開かれました。はしゃぎ過ぎた学生もいたらしく、翌日には警察官が学生寮にやって来てお叱りの言葉を言ったくらいです。でもこんなことは、毎年恒例行事らしく、学生寮の管理人も大して驚いた様子はありませんでした。

そして、私が最も感動したのは、5月31日の晩にもう寝ようとしていた10時前後、泊まっていたホテル（私のホテルは大学構内にあり、学生寮とも共有していました）のすぐ側のグラウンドで50発ちかくの打ち上げ花火、群馬の各都市で行われている程の大掛かりなものではありませんが、かなりの規模で迫力のあるものが、夜空を華やかに演出してくれました。誰の発案なのかは分かりませんでした。その花火が終わった後には、寮の至る所から歓声と拍手がわき上がっていました。「卒業おめでとう！」の意味だったのは説明されるまでもありません。その時はドイツの新年を思い出しました。

チェコ人の娯楽といったら、やはり一番に揚げるのが「アイスホッケー」観戦です。彼らは誰もがアイスホッケーの熱狂的なファンで、国際試合の次の日は学食などでもその話で盛り上がっていました。いきつけのレストランでも、大きな画面のテレビで常にアイスホッケーの実況中継が行われていました。そのせいか、チェコ人のほとんどが、1998年の「長野オリンピック」を知っています。それは、チェコの代表チームが、宿敵ロシアを破って金メダルを獲得した歴史に残る大会だったようです。私が日本人と分かると、必ずとっていいほど「東京か、長野から来たのか？」と訊かれました。

チェコにとっての日本は、未だに「ジパング」といった未知の国であり、ハイテクノロジーはもとより、尚かつ自然を大切に古く古い習慣を重んじている国として受け取られています。私の学生は、2クラスで30人程でした。中には大学の職員（先生方）もいました。彼ら（先生方）は1～2回は日本に来た事がありました。大学生達は一人もいませんでした。何故彼らが日本語を習いたいと思ったか訊いてみたら、やはり日本のアニメからの影響が大きく、「セーラームーン」や「ドラゴンボール」「NARUTO」、それから「DEATH NOTE」といった、日本ではもう流行が終わったものまでが人気でした。老若男女を問わず知られていたのは、あの「ゴジラ」でした。その他の理由として、先進国である日本に憧れていて、日本とのコネクションを持ちたがっている学生もいました。その先進国として、「新幹線」は誰もが知っている代表的な乗り物です。日本に来て乗ったことのある誰もが、新幹線の高速と安全性に感銘しており、まだ乗ったことのない

学生にとっては、「憧れ」の象徴と言っても過言ではありません。ただ、相変わらずに、芸者や富士山、侍、忍者というのは、やはりどこの国とも同じように言われてしまいました。

私は、約17年前に10ヶ月程ドイツに滞在した事がありますが、ここでドイツとチェコの大きな違いを述べたいと思います。チェコ人の性格は、私が接したほとんどの人達が、親切で人懐こいです。初めて会った人でもそうです。更にサービス精神旺盛で、知らない事でも粘り強く調べてくれたりしました。中には、少々お節介な部分もみられ、そこはさすがにドイツ人とこの点においては、大きく異なっていると思いました。

町並みは、古い街程きれいな佇まいをしておりますが、オストラヴァのような都会になってしまうと、道路にはタバコの吸殻が数えきれないほど捨ててあり、今の日本では考えられません。公共物に対しての落書きも目に付きました。また、若者の喫煙もかなり多く、私がいつもお世話になっていた先生は、その事を随分と嘆いていました。そして、多くの若者がタトゥー(刺青)を入れていました。それも、大学内でも堂々と見せて歩いていましたから、私達日本人の感覚とちょっとかけ離れたところを感じました。車もドイツ人



【オストラヴァ市内をスロヴァキア出身の英語の先生と】

ほど丁寧に扱わず、結構汚くしていても平気な人は多かったと思います。ただチェコでも日本車の評判は良く、多くの日本車を見掛けましたし、ほとんどの人達が日本車の高性能を褒めてくれました。

今回もヨーロッパの心臓とも言われるプラハを訪問して来ましたが、5年前とあまりに違ってしまったのにはショックでした。それは、外国人観光客(特にアジア)は、中国人と韓国人がほとんどで、街を歩いているだけでも、日本人に出会う事は滅多にありませんでした。ここでも、世界に対する経済力がものをいっているのかと、痛感しました。

チェコは、ドイツに負けない位の音楽(主にクラシック)好きの人が多く、あのスメタナやドヴォルザークもチェコ出身です。毎年5月になると、「プラハの春」といった音楽の祭典も行われています。私も帰国間際にコンサートに連れて行ってもらいましたが、チケット代が安い割には本当に素晴らしい音楽会でした。

チェコはまた教会の数も、かなりのものでした。どんなに小さい街でも、きちん

とした（変な言い方ですが）教会は沢山あり、歴史的にみても由緒ある所ばかりでした。その中でもオロモウツには、限りなく神聖で重厚な絵画やパイプオルガンのある教会が多いです。街の広場には、世界遺産の聖三位一体の像もあります。チェコ共和国は、ボヘミア・モラビア・シデジアの一部の3つのエリアで成り立っています。私が滞在していたオストラヴァもオロモウツもボヘミアというよりは、モラビアになります。チェコは、そのモラビアから発祥しているそうです。

大学の英語を教えている先生に連れて行ってもらったお城に、ベートーベンが晩年を過ごし、彼のデスマスクまでもが保存されてある所がありました。チェコにもドイツ同様に、古くて歴史のあるお城が多いです。



【オストラヴァ近郊にある「ベートーベン」のデスマスクが置いてあるお城】

今回は、残念ながら隣国ドイツには行けませんでした。もし皆さんがドイツにいらっしゃる機会がありましたら、是非ともチェコにまで足を運んでもらいたいです。

では、Na shledanou（ナスフレダノウ）！さようなら。

5. ハイマートに寄せて – ドイツ旅行の豆知識 – (マンハイム在住 大和田 邦子 記)

再びドイツからハイマートに寄稿させていただくことになりました。今回、第2弾はドイツ旅行をテーマに、お役にたちそうな情報を書いてみました。

チップ

ドイツ又はヨーロッパで誰もが遭遇するのがチップ。日本にはない習慣だけにどのくらいあげたらいいのか迷うのは当然である。相応額をタイミングよくスマートにあげるのに慣れるには、多少のテクニックを要する。チップは飲食した料金の10%とか20%支払うものだと思っていられっしゃる方がいるようだが本当にそうなのか。たとえば30€の食事をしたら3€とか6€もあげるということだが、普通なみのレストランでそんなにあげたらウェイトレスは、なんと気前のいい外人、と思うに違いない。たいてい端数切り上げ、つまり32ユーロ30セントだったら33ユーロ、ちょうど32ユーロだったら33ユーロにする可能性はある。高級レストランだったら10%でもおかしくないかもしれないがたとえば200€かかったら20€も出すのだろうか。そんな高級レストランに行ったことがないのでその世界のことはよくわからない。



チップはあくまでも気持で義務ではなく、礼儀のようなものかもしれない。年少者や学生など収入がない人はたとえ親のお金であってもあげない場合が多い。また、お料理を注文したあとなかなか出てこない、ウェイトレスの態度が悪い、支払いを希望してもなかなか来てくれず、急いでいる時に出口で支払うことになる場合にはチップはあげないことがある。客は態度で示す。一方カフェでは端数切り上げか50セント前後のチップをあげるか全くあげない場合などさまざま。カフェでは労働が少ないからだろうか。ウェイトレスは給料が少ないのでチップをもらって足しにすると聞いているがお客さん一人一人から50セントから数ユーロももらったら一日分はかなりの額になりそうだ。ところがつい昨日会った人の話によると、このごろのメニューには料金の中にチップ代も含まれている、と下に小さく書かれているとのこと。私は今まで全く知らなかったもので、今度どこかのメニューを詳しく調べてみたい。その方はそれを読んでも少しチップをあげるらしく、習慣とは恐ろしいものと思った。

さて次は肝心の支払い方法。印刷されたレシートやテーブルで計算し、書かれた項目と金額の内容を一応正しいかどうかチェックする。以前、金額が間違っていたり、余分なものが入っていたことがあったのでそれは慎重に行うことにしている。飲食の項目、値段がすべて正しかったら①チップを入れて「これでいいです」②「(いくらいくら) お願いします」③支払った後お釣りの中から小銭を渡すか目の前でテーブル

に置く、のうちのどれかになると思う。あせって確認したり、チップの額を決める必要はなくゆっくり落ち着いて考えて相応に支払えばあとで後悔することはないだろう。間違いは遠慮なく指摘し、その為に金額はなるべく覚えておくことだ。



飲食以外にもチップが関係するのはタクシー。重い荷物をトランクに入れてくれたら1ユーロ以上は払ったほうがいい。ホテルはといえば料金にはサービス料が含まれているようなのであげたことはない。しかし高級ホテル（5つ星以上）はあげるものなのか。とにかく「高級～」とつくところはそれだけお金がかかりそうだ。

ドイツ人の支払い方

人と一緒に食事する機会は多いと思うので、その際気が付いたことについて書いてみる。

少し年配でドイツに1年以上住んでいた、結構ドイツ生活にも慣れてきている友人が「誰かと一緒に（日本人かドイツ人か不明）食べるといつも自分が全部払うことになり納得がいかない。自分は払うつもりはないのにどうしてそうなるのかわからない」と私に訴えてきたことがあった。私の主人のやり方を見ていると支払う段になり、ウェイトレスが皆の前で「一緒に払いますか、別々ですか」と聞いたときすかさず「私はこれとこれを払います」と自分（+α）が飲食した物を言ってそれだけの金額を払う。それでも同席者が「私が全部払います」と言ったらこちらは一応辞退するものの相手はたいがい主張するので結構有難く受け入れている。日本では一緒に飲食すると大人の世界では年上だから、または成り行きで一人が全部払うことがあるかもしれないが、ドイツはそうとは限らない。お世話になった人にお礼として、また自分がお誕生日だったら払うことはあっても、何もないのに人の分まで払う必要はない、と割り切って考えるのが普通のような。割り勘もあまりない。

ドイツでは11月11日の聖マルティンの祝日からガチョウを食べる習慣がある。それを利用して、私が関係しているマンハイムの日立ハイテクノロジーズで仕事をしている日本人社員と日本語をしゃべるドイツ人に声をかけ、毎年「ガチョウを食べる会」を開いている。数年前日本式に全部の料金を人数分で割って支払うことにしたらドイツ人から文句が出た。その後は皆で食べるガチョウの料金だけを割ることにした。自分はあまり飲んでいないのに人の飲み代まで払うのはおかしいという考え方のようだ。

日本の友達と飲食するとたいてい割り勘で、主人も腑に落ちないことがあるようだ。私たちはあまりアルコールを飲まないのに友達でやたら飲む人がいるからである。もっとも10人ぐらいで複数の料理を一緒に食べるのだから割り勘でしか払いようがないのだと思う。ドイツでは殆ど見られない食べ方で、日本での付き合いは時々自分の意に反することがある、と主人は思っているに違いない。

ドイツの鉄道

ドイツ語の旅行会話の本を読んでいたら、「ドイツの鉄道は時間に正確」、と書いてあって大変驚いた。昔はそうだったかもしれないが現在は全く違う。最近のブログなどを見ているとやはり遅れが目立つと書いてある。最近長距離列車が遅れないことは珍しく、5分や10分ではなく、30分、1時間の遅れも少なくない。原因は送電線の故障とか工事中、なぜか車両を替えたとか原因不明の場合も多い。駅での乗り継ぎが間に合わない場合は最悪で、予定が全く狂うことになる。近距離列車への乗り継ぎならまだしも、マンハイム乗り継ぎでパリに行く予定だった人が乗り継げなかったということがあり、本当に気の毒だった。ちなみにパリへはここから3時間半で行けるが、列車はそう頻繁



に走っているわけではないし、遅い時間だとその日にパリに着けない。遅れているときは駅の電光掲示板に表示されるがこれも要注意。遅延時間が短い場合はその分どこかで暇をつぶそうとは考えないほうがいい。予定より早く電車が来てしまうこともあるからだ。時々出発ホームが変更されてアナウンスがあり、聞き逃すと乗り遅れることもある。変更の時はホームで待っている多数の人が突然移動し始めるので、その人たちや駅員に聞いたほうがいい。駅員はたいてい英語が話せる。

ほかに列車が間引かれることはまれではあるが、私と会う約束をしていた友達がフランクフルトで乗り換えるとき、予定の列車が走らないことをアナウンスで知った。次の列車について駅員に聞いたところ出発ホームを間違えて教えられ、飛び乗った後でその列車が反対方向に向かっていることに気づいたがすでに遅し、その日はとうとう会えなかったケースもある。でも鉄道の旅は楽しいもので、ジャーマンレイルパスを買えばある程度うまくいかなくても收拾はつくかもしれない。私たちも問題だらけの鉄道でもよく利用している。

さて、次回は「ドイツ的な視点から見た日本、日本的視点から見たドイツ」みたいなものを書いてみようかしら..

6. デザイナー修行奮闘記 — 連載 4 (井上 晃良 記)

勇躍、ドイツへ

今思えば、私が滞在した9年間のうち、大学入学迄の最初の1年間は、心理的に最も忍耐の必要な期間であった。それは、私を心から応援してくれた同業の友人知人がデザイン現場で活躍するのを尻目に、私自身は自分の大きな目標に向って躍進すべきではあるのだが、暫くの間、私の本来の目的であるプロダクトデザインの世界とは離れなければならなかったことが、正直な感想として辛かったからだ。まだドイツ語もままならず、私が得られる情報も少なく、焦りばかりが募る日々をブレーメンの街で毎日、語学学校と寮やホームステイ先への往復をする毎日であったためである。

一方で、ここでの1年間はドイツ語を学習しながら、それまで居た日本外から冷静に眺め分析出来た期間でもあったように思う。ドイツではごく普通に行われていることがら、対象が同じでも日本とは考え方が異なるので、結果も違う。その違いをブレーメンの街で見ながら、日本との違いに至るプロセスを自問自答した日々でもあった。そう言う意味では、ドイツという国を理解するためには、この助走期間とも言える1年間も無駄な時間ではなかったのかも知れない。

9月初旬から始まるブレーメンの語学学校へ入学するため、私は7月末で勤めていた会社を退社し、語学学校への手続きはもちろん、西ドイツの留学ビザ申請や航空券の手配など渡航準備にいそしんだ。語学学校は、ゲーティンスティテュートと呼ばれるところで、語学学校だけではなく、ドイツ語の普及や世界の文化研究も行っている機関の一つである。西ドイツ政府の機関に属しており、ドイツ語学校は世界中にある。日本にも東京の他、大阪や京都にもあり、そこで行われるドイツ語検定試験の基準は、外国人が西ドイツの大学入学時に語学能力の証明として使う事が出来る。一方でドイツ語の普及機関としての役割は大きく、西ドイツ国内にあるゲーティンスティテュートの入学許可証で西ドイツの留学ビザを取得することが可能である。但し、他のビザ同様、初回ビザは3ヶ月のみ有効であり、次回以降はドイツで更新する必要がある。航空券は、通常なら往復で購入するのだが、次にいつ帰国するか決めていないので片道切符となった。もちろん往復航空券より片道の方が安いのだが、あまり差がなかったように憶えている。

1988年8月下旬のことである。成田空港へは、母や数名の親友も見送りにきてくれた。その時の自身の気持ちを思い出す事は難しいが、100%希望に満ち溢れていたと言えばウソになる。大学時代の友人は私の出発前に壮行会を開いてくれたし、既に会社を辞めている私は、そう簡単には帰国など出来ないのである。背水の陣とはこのようなことを言うのであろう。もちろん自分自身が西ドイツへ行きたいから決断をした訳であるが、当面の目標は大学入学で、その目標を達成するには、ドイツ語をマス

ターし、大学受験資格を取り、入学試験に合格しなければならない。今迄真面目に外国語を勉強していなかった私が、ドイツ語を日常とする国へ長期で滞在するということがどういうことであるか。西ドイツに頼れる知人も居ない。成田空港で手にしていたのは、2つの鞆と3ヶ月間有効の留学ビザが付いたパスポート、そしてブレーメン行きの片道航空券である。目の前にある幾つもの高くそびえる壁を目の前に、夢と希望だけが自分を奮い立たせる唯一の抛り所であった。この世に生を受けてから今迄何不自由なく生きて来れたことが、これから先は自分自身の判断一つで変わる世界へと旅立つのであることを身にしみた瞬間でもあった。観光客やビジネスマンに混じって機内の人になる。普通なら機内食や上映される映画が楽しみであるが、機内の事など記憶にほとんど残っていないところを考えると、私にそのような精神的な余裕など無かったのであろう。

(続く)

(本記事はイカロス出版株式会社発行『鉄道デザイン EX 01』に連載されたものを転載したものです。同社のご好意により転載の許可をいただいています。)